

令和7年度第1回中野区総合教育会議

- 1 日 時 令和7年(2025年)10月3日(金) 開会:10時30分
閉会:11時57分
- 2 場 所 区役所6階604・605会議室
- 3 出席者 (構成員)
区長、教育委員会教育長、委員
(関係職員)
青山副区長、栗田副区長、企画部長、総務部長、子ども教育部長・教育委員会事務局次長、子ども教育部子ども家庭支援担当部長・教育委員会事務局参事(子ども家庭支援担当)、企画部企画課長、総務部総務課長、子ども教育部・教育委員会事務局子ども・教育政策課長、子ども教育部・教育委員会事務局学校地域連携担当課長、教育委員会事務局指導室長
- 4 議 題 ①中野区立学校における「子どもの意見を反映させた教育活動」について
②コミュニティ・スクールについて
③中野区教育委員会における「英語教育」に関する取組
- 5 傍聴人数 9人

6 議事経過

【午前10時30分開会】

[総務部長]

それでは定刻となりましたので、ただいまより中野区総合教育会議を開催いたします。私は司会を務めさせていただきます、総務部長の濱口でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

教育委員の皆様におかれましては、お忙しい中ご出席いただきましてありがとうございます。この総合教育会議は、区長と教育委員会が教育行政の大綱や重点的に講ずべき施策等について協議・調整を行う場でございます。自由な意見交換を通じて区政と教育行政の連携を図り、効果的に教育行政を推進していくことを目的とさせていただきます。

なお、会議の様子は記録のため撮影及び録音を行う場合がございますので、あらかじめご了承くださいませよう、お願いいたします。

それでは、本日の議題についてご案内いたします。①中野区立学校における「子どもの意見を反映させた教育活動」について、②コミュニティ・スクールについて、③中野区教育委員会における「英語教育」に関する取組の3点でご協議いただきます。

進行につきましては、議題ごとに各担当課長から資料の説明を行った後、ご協議を賜りたいと存じます。

なお、本日の会議は全体で1時間半となります。議題1つにつきまして30分程度を目安に進行いたしますので、ご協力のほどお願いいたします。

それでは、議題①中野区立学校における「子どもの意見を反映させた教育活動」についての協議に入ります。資料について、指導室長より説明をお願いいたします。

[指導室長]

私から本日の1つ目のテーマでございます、中野区立学校における「子どもの意見を反映させた教育活動」について、ご説明をさせていただきます。

今、中野区の全区立小中学校におきまして、これまで以上に子どもたちの意見や考え、思いを形にできる場となるよう、改善を図っているところでございます。こちらは昨年度の区の学力調査で行った意識調査の中の、2つの設問の結果になります。上段が「授業で習ったことをふだんの生活と結びつけて考えている」という設問。下段が「自分たちの学習や生活をよくするための話し合いや活動に、すすんで取り組んでいる」という設問で

ございます。残念なことに、この2つの設問につきまして、赤字でお示ししている部分でございますが、多くの学年で全国平均より下回っているという結果が出てございます。

この結果から、中野区の子どもたちには、授業で学んだことを日常生活に結びつけたり、自分たちの学習や生活を良くするための話し合いや活動に取り組む姿勢、いわゆる学びに向かう力にやや課題が見られると言えます。

この課題を受けまして、中野区教育委員会は、学校が子どもたちの意見を生かして特色ある教育活動を実施することで、これまで以上に子どもたちの達成感、成就感、自己肯定感を実感させることができ、その結果、子どもたちの学びに向かう力を高められるような学校づくりを進めることができると考えました。

第4次教育ビジョンにおきましても、中野区子どもの権利に関する条例の趣旨を踏まえ、子どもの権利について児童生徒が知る機会を設けるとともに、自分の意思や考え、思いを表明する取組を充実しますと位置づけております。

子どもたちの意見や考え、思いを形にできる学校づくりを進めることが、子どもたちの達成感や成就感、自己肯定感を高めることにつながっていきます。

具体的な取組といたしまして、子どもの意見を反映した教育活動として、小学校1校当たり20万円、中学校1校当たり30万円を配当し、子どもたちが企画・提案した行事等を各校で行ってございます。

例といたしまして、こちらはある中学校が国境なき医師団による講演を企画した流れになります。生徒会が中心となってテーマを話し合い、講師への依頼・連絡、当日の運営、振り返りを行ったことで、子どもたちのやってみたい、こんな学校にしたいという気持ちを実現し、主体性を育むことができました。

そのほかに、小学校では子どもの発想を生かしてクリスマスコンサートを行ったり、子どもたちが区長にお話を伺うなどして、作詞し、楽曲を製作したりするなどの取組が行われました。

中学校では、人権活動が盛んに行われている学校で、東日本大震災の被災者を招いて講演会を行ったり、世界で活躍するトップアスリートを招いて講演会を行ったりしました。また、子どもの意見を反映した学校行事としまして、体育祭の種目を子どもたちの意見を生かしたオリジナルの種目を実施している学校も増えてございます。

こちらは中野東中学校のオリジナル種目の一例でございますが、自分たちで決めた種目に取り組むことで、前向きな姿勢が見られ、楽しそうに競技を行っている様子が見られま

した。

学校は、子どもの意見を反映した授業づくりにも取り組んでおります。授業改善の視点としまして、興味・関心を引き出す工夫、児童・生徒による学習課題の設定、児童・生徒による学習内容や学習方法の選択、振り返りの工夫などが挙げられます。

最後になりますが、これらの事業は昨年から取組を開始したものがございまして、改善の余地は多くあると考えておりますので、ぜひご参会の皆様のご意見を踏まえまして、学校とともに取組を発展させてまいります。

ご清聴ありがとうございました。

[総務部長]

それでは、区長、教育委員の皆様のご発言をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

[区長]

皆さん、本日はよろしくお願いいたします。

総合教育会議は久しぶりに開催されるのですが、やはり定期的にこうして集まり、議論を重ねることは重要だと感じています。久しぶりの開催ということもあり、その間に議論のあった事項について、現状を皆さんと共有して、来年度の予算もそろそろ始まっていますので、そこで生かせるものは生かしていきたいと考えています。

議題の「子どもの意見を反映させた教育活動」ということで、この取組は予算がつき、昨年いろいろな事例が挙がってきて、今度区報でも大々的に取り上げようかなと思っているところですが、これはなかなかいい取組だと思います。新聞にも取り上げられたりする取組もあったのですが、予算がついてまだ1回目ということもあり、現場ではどのような課題があるのか気になっているところです。教育委員の皆さん、ぜひご意見をお聞かせいただければと思います。

[伊藤委員]

これはすばらしい取組だと思っております、子どもたちにとっても予算を使って学校の中で何かができるというのは、すごく大きな体験だと思うのですよね。

課題ということをおっしゃってくださったのですが、先日、全ての校長先生より、どのような形で、現場でされているか、中学校を中心にお伺いする機会がありましたけれども、先ほど運動会の話がありましたが、30万円にとどまらず、様々な活動の中で意見を聞くと、発展していくといいと思うのですね。もとより、今、授業も意見を言う授業に

なっていますよね。主体的に学んだり、話し合ったりとなっていますので。この30万円ということだけでなく、学校全体に子どもたちが自分の考えを持って、問題意識を持って、そして具体的にアクションを起こしていくという流れに。

そういう流れを、学校全体として、地域のサポートも得ながら非常にうまくできたという事案もあれば、まだこれをどうやって使ったらいいか分からないので、極端なことを言うと、備品にしようかということもあるようなお話も伺いましたので、やはり、この30万円だけではなくて、この30万円をシンボリックに使いながら、学校全体として子どもが意見を言いやすく、また子どもが主体的に考えて、そして学校が変わっていく。先生もそこから学び、そういう方向を中野区は全体として応援している、推進しているというところを、教育委員会でも強く押し出していくことが必要かなと今、思っているところです。

[区長]

この予算をつけたときに、校長先生の会にたしか出て、一番に言ったのは、「くれぐれも学校の先生たちが決めないようお願いします」。当たり前のことなのですけれどね。それで、皆さんいろいろ試行錯誤を重ねているのではないかなと思っています。

でも、結局は、まさに伊藤委員がおっしゃったとおり、お金の使い道を決めるから子どもたちに決めさせるというのは入り口であって、学校教育においてもっと幅広い範囲で子どもたちが、例えば学校経営とか、学校の何か行事に関わることができるような仕組みに発展していくような、そういうイメージがあると、この取組もやってよかったかなとなるのかなと思いました。

[岡本委員]

私もすばらしい取組だと思っています。課題ということですので、教育委員会が出た話としては、予算の枠が、報償費と一般需要費という2つの費目に分かれています。どうしても報償費と聞くと、今、伊藤委員からもお話があったように、誰か著名な方を呼んで、その謝礼に充てるものだと、最初からそういう頭になってしまって、その結果、来年もそうすることになってしまったみたいなお話もありました。それだとあまりにももったいないので、この予算の中で、伊藤委員がおっしゃいましたけれども、より自由度が高まるような、いろいろなことができますよというアピールをこちらとしても、もっとしないといけないなと思っています。

ただ、ちょっと気をつけたいのが、この予算全体は確かに中野区として独自の取組で目立つと思うのですが、我々が子どもに「この教育活動はすばらしいね」という評価のまな

ざしを持ってしまうと、子どもはやっぱり忸度してしまうと思うのですね。大人に評価されるための教育活動になってしまっただけでは、それは子どもの成長につながらないのではないかなと思います。失敗してもいいと思うのです。失敗こそ学びなので。校長先生方からは、子どもの声の聞き方がやっぱり難しいというお話もありました。アンケートをとっても、いろいろな視点の意見が出てきます。実際それをまとめるのも難しいので、最終的には中学校だったら、生徒会が中心になって、これがいいのではないかと決めるけれども、やっぱりそこには先生のまなざしがあるのではないかなと、僕は想像しています。

学校でやるから、それでいいのかもしれないけれども、本当は子どもたちが自分たちで、失敗も含めて全てを体験してほしい。全てを体験できる活動になってほしいなと思っています。

もう1つ課題という意味では、「子どもの意見を反映させた教育活動」という名称はちょっと正直やぼったいなと思っています。それこそ子どもから意見を募って、もっと子どもが前のめりになるような、わくわくするような教育活動の名称をつけたほうがいいと、僕は思っています。

[区長]

最初に何がアウトプットとして出てきたとしても、それは失敗しても何でも構わないから、まずは頑張ってくださいという話をしたのですけれども、やっぱりプロセスですよね、我々が大切にしているのは。試行錯誤して、また次の年によくなればいいかなと思いますね。

それと、予算の費目が壁になるとは思っていなかったのですけれども、それは解決できそうなのですか。

[教育委員会事務局次長]

最初の予算のときには、予算が決まってから何をやるかというのを決めていたので、報償費というところになったのですけれども、前年度の予算積算の前に、どういったことをやりたいという話し合いを始めることによって、来年度はこれでいきたい。その検討を前倒しすることによって、予算がどの費目でいくかというのを決められるようになったので、初年度よりはいいと思うのですけれども、でも、途中から変えられないという課題は残ってくるのかなと思うので、そのやり方の工夫というのは今後も考えていく必要があるかなとは思っています。

[伊藤委員]

個人的には、やはり子どもも現実にはいろんなルールがあるのだという、税金教育ではないですけども、区の予算はこういう中で皆さんが工夫してくださっているということが分かるかもしれないので、それはそれでいいかなと思っているのですが。

ただ、参考までに、ご存じだと思うのですが、お伝えすれば、我々の研究費も、例えば科学研究費は単年度予算だと年度内に使い切らなければいけないとか、非常に縛りがきついのですが、それが基金という形になりますと次年度に繰り越しもできますし、また、それをお返しすることもできるしということになりました。区の予算とは異なりますので、同じような方策があるかどうか分からないのですが、長期的には何かそういうことがあったら良いかもしれません。多分学校としては、予算の使い方を自分たちで組むということは、研究者と違って、慣れていらっやらないかもしれませんが、そういう工夫は1つ大きな、現実的な要素になってくるのかなと思います。

[区長]

分かりました。改善は我々としても考えてまいりますので、なるべく教育目的に沿った制度になるように努めてまいります。

[平本委員]

他の委員からもお話があったとおり、限られた予算の中で既に各学校の子どもたちが工夫して、実現したいことに向けて話し合っ、行動していくプロセスというのを各学校の先生からも共有していただきましたので、今すごく良い事例が積み重なっているなど、前向きに捉えています。

他区の人権擁護委員の先生からも、「中野区のこういう活動を新聞で見た、記事で見た、すごくいいね」という話をいただきました。

課題というところで言うと、既にできている学校もあるので、例えば1回だけ誰かを呼んで講演というのも、もちろんすばらしい経験だと思うのですが、なるべく子どもたちが意見を表明して、アクションしていく機会が多いほうが良いということも見えてきています。更に言うと、強制するわけではないですが、地域とも深くつながっていくような形にもできると良いですし、視野が広がっていくように学校の先生方の伴走もできると良いです。子どもたちから主体的にそういう声が出て来るようになると、より良くなるという課題の部分も感じていますので、そういうところを各学校で既に共有はして頂いておりますけれども、発信については、区報にも取り上げていただけるという話も出たので、良い事例として、「こういうやり方もあるよ」ということで、ぜひ区民に向けて発信

していただいて、地域とつながって、子どもたちも地域に目が向いていく方向の使い方も広報して頂けると良いと思いました。

先ほど少し話も出たのですけれども、これはきっかけにすぎないと思っているので、既存の学校行事とか修学旅行の行き先をどうするか、授業の方向性をどうしていくかというところに、本当に様々な日常の場面で、子どもたちの意見を取り入れていくようなきっかけになるといいなと思います。そういうところに時間とか予算とかをもう少し割けるようなプロセスの確保もできるといいかなと思っている次第です。

[高野委員]

皆さん、運動会など、予算のかからないほうはいろいろご意見いただいたので、この30万円、20万円の子ども意見を反映させた教育活動について意見したいと思います。

去年は報償費だけだったかと思いますが、報償費ですと、やはり演者の先生を依頼して、著名人などに講演していただくという形が多かったと思います。今年から、備品などを購入できるようになっているということで、各校特色ある方法がありまして、文化祭のような形で使用したり、また学校によっては学年ごとに10万円ずつ分配して、各学年で決めたりするなど、かなりユニークな方法があったと思います。

ただ、1校だけ、たしか暑さ対策の備品を購入したという中学校もあったかと思うのですけれども、子どもたちも選んでいただいたのでいいのですが、できればそういうのは区のほうで整備していただければと思ひまして、それだけお願いしたいと思ひました。

[区長]

まず先に平本委員の話で、まさに地域に発信していくということは、やったほうが良いと思ひて思ひまして、教育委員会はいいことをやっているのに、発信が弱いというのを私もずっと思ひて思ひて。

もともと「教育だより」というのがあったのですよ。昔は「教育だより」が区報の一部になっていた。でも、それがなくなって、教育委員会がつくろうと思えばいつでも、特集記事を空けますよみたいな話をしていただけけれど、「教育だより」をやめた途端に、教育委員会からこういうことをやりたいという要望があまり来なくなってしまったのですね。だから、仕組みとしてどうだったのかなというのは今でも思ひますけれども、まずは、今は「教育だより」はありませんが、いつでも巻頭特集を空けて待っているという状態でありますので、ぜひちょっと企画を。まさに今回のこの子どもの予算の話は、ぜひ発信していただきたいなと思うので、そこはよろしくお願ひします。

そして、それが誰に届くかという、やっぱり地域の人たちに届いて、この後話すコミュニティ・スクールにまさにつながってくる話だと思いますので、すばらしい提言だと思います。

高野委員も、ありがとうございます。そうなのですよ。今日の議題にはないですけども、PTAとの懇談会とかでも、「こういうことに早く予算をつけてほしいのだけれど」というのもたくさんいただいているのですが、今、区としては暑さ対策というのが喫緊の課題で、来年やれることをやりますよと、音頭をとって各部にも検討してもらっていますので、その中でやるべきことはちゃんとやっていこうと思います。

[教育長]

私が思っているのは、予算額が20万円、30万円という予算だけが先に決まっているところの金額で何ができるのか。もっとこういうことをしたいのだけれども、この予算では足りないとか、そういう方向にいつてしまうのは良いことではないと思っています。

私が校長だったときに、生徒会の生徒たちに1人1台のタブレットが整備されたのだから、生徒会もこれを有効活用して紙を節約しようと提案しました。それまでは、生徒総会の議案書や生徒会選挙の選挙公報も全校生徒分印刷して作っていました。

生徒会の生徒たちが頑張ってくれて、議案書や選挙公報も全部データでタブレットに送り、紙を節約しました。結果的に1年間で6万円ぐらい印刷代と紙代が節約できたので、朝礼で子どもたちに生徒会が頑張ってくれたので予算の節約ができましたと話しました。そして、この節約できた予算は生徒会で使って良いと提案しました。みんなで話し合って決めなさいと伝えたら生徒会が何回も議論を重ねて、結果的に出た答えがクラスに掃除機を設置し、残ったお金は昼休みに体育館で使用するバスケットボールを購入することになりました。今回は予算が決まっていますが、もっと大きなことをしたいとなったら、予算を増やすためにはどうしたら良いか、また子どもたちに考えさせて、足りない分は自分たちで考えさせたら良いのではないかと思います。さらに子どもたちも知恵を出して、良い活動につながるのではないのでしょうか。

[区長]

ありがとうございます。まさに額が限られた中で何をするかとか、額が足りないのだったらどこから調達するかみたいな。そういうところまでつながると面白いですよ。クラブファンでお金を集めるというのは、この前、ニュージーランドの人から聞いたら、キャリア教育の中でそういうことをやらせているというのも、結構始まっているというのも聞き

ますので、逆に言えば、そういうものも先生がなかなか示唆するというのも厳しいかもしれませんので、そういうプロセスを共有していくことというのが大切かなと思います。ぜひ、そこは教育委員会さんとしてもやっていただければと思います。

では、次の議題にいきましょう。

[総務部長]

ありがとうございました。では、1つ目のテーマはここまでとさせていただきます、次に議題の2番になります。「コミュニティ・スクールについて」の協議に入りたいと思います。初めに、資料について、学校地域連携担当課長から説明をお願いいたします。

[学校地域連携担当課長]

では、資料についてご説明させていただきます。

グローバル化や急速な情報化、技術革新など急速に様々な変化が生じ、価値観も多様化する近年におきまして、子どもたちにとって、よりよい教育環境や学校運営の改善を実現するために、学校だけではなくて家庭・地域がともに話し合い、よりよい学校の運営について考える機会が必要という考えの下に進められているものでございます。

このような学校と地域の話し合いの場が、学校運営協議会です。コミュニティ・スクールとは、学校運営協議会を設置している学校のことをいいます。地域の知恵や人材を生かした教育活動が可能となることが記載されております。

これまでの変遷を簡単にご紹介いたします。国が2000年、教育改革国民会議においてコミュニティ・スクールの設置というのを提言しまして、2017年に導入の努力義務化をいたしました。2017年には3,600校でしたが、2024年には全国で20,153校が設置している状況でございます。

中野区においては2022年度より、保幼小中連携を踏まえ、中学校区を単位とした地域学校運営協議会を設置いたしました。同時に協議会を設置している中学校区の各学校に、学校と地域団体、人材をつなぐ役目を担う「地域コーディネーター」を配置しております。

中学校区での協議会においては、小学校と中学校が情報や課題を共有するため、小学校と中学校の連携を踏まえた、より継続的な学校経営を行うことができる。それから他校の地域連携事例を学ぶ機会となるなど、お互いが持っている強みを共有し、自校の運営に生かすことができるといったメリットがある反面、中学校区としてのテーマが中心となるため、学校個別の課題に対応する取組など、具体性のある協議を行う機会が少ない。また、学校に関わる課題は学校固有のものが多いため、学校単位のほうが協議しやすいといった

課題があることが分かりました。

そこで、令和7年度より話しやすさと認識の共有を推進するために、各学校、幼稚園ごとに「学校運営協議会」を設置することとし、また中学校区ごとには、地域の教育課題や認識を共有する場として、「学校運営連絡会」を行うことといたしました。

学校運営協議会で話し合うテーマというのは主に4つとなります。1つ目は、目指す学校像・ビジョンの共有です。学校のゴールとなるべき目標やビジョンを協議会で共有し合うとともに、承認により基本的な方針を決定することで、協議会として話し合う方向性を統一いたします。

2つ目は、課題と改善に向けた協議です。基本的な方針を踏まえた上で、学校の教育活動や学校運営の状況を確認し、その課題と解決に向けて話し合いを行います。

3つ目です。具体的な取組に向けた協議です。先の課題の解決に向けた話し合いを踏まえ、学校と地域が連携して、具体的にどのように取り組んでいくか、また、取り組むに当たり、地域のどのような団体や人材に協力を得ていくかなど、実際に実施することに向けた話し合いを行います。

4つ目は、教員像に関する協議でございます。基本的な方針や、それに基づく学校運営の現状を踏まえまして、学校に必要な教員像について話し合いを行います。

ここからは、学校運営協議会の様子をご紹介します。こちらは鷲の杜小学校の学校運営協議会の様子でございます。委員数は11名でございます。中学校単位の頃より話がしやすい人数となっており、また委員のほうも、ふだんから学校と関わり合いが深い方々が選ばれているため、笑顔や笑い声がとても見られる雰囲気での話し合いが行われました。

次に、江古田小学校の様子です。こちらは大きく他と違うところがございまして、江古田小の委員の8割が卒業生で成っておりまして、高校生、大学生など10代を中心に構成されております。数年前までは実際に江古田小学校に通っており、自身もまだ学生ということもあるため、児童の気持ちに寄り添った意見や、具体的な取組への提案が多く交わされておりました。

最後に、美鳩小学校の第2回の学校運営協議会の様子でございます。この日は教員と委員が一緒に、学校の運営をよくするために何ができるかということについて話し合いを行いました。グループワークにより、直接委員と教員が話し合う機会が持たれたということで、委員の学校に対する距離感が縮まったということになりまして、委員だけではなくて、

また教員においてもお互いに協力できることは何だろうというような話し合いができ、とてもいい機会だったと聞いております。

今後の方向性についてです。まず学校運営協議会、地域コーディネーターの認知度の向上です。地域と学校の連携を進めていくためには、地域の住民たちに学校と地域がつながる場である学校運営協議会という名前や、つなぎ役である地域コーディネーターという方々の存在をもっと広く知ってもらう必要があると考えております。

これまでも区報での特集やJ：COMでの取材などで広報を行ってきたところですが、今後継続的に広報誌を発行するなど、取組を継続していけるような環境をつくっていきたいと考えております。

次に、連携・協働する地域団体・人材とのネットワークの拡充です。学校の状況に合わせた多様な連携を可能としていくためには、学校側がより多くの地域団体・人材と関わり、関係を築いていく必要があると考えております。そのためのポイントとなるのが地域と関わり、ネットワークを広げていく役目である地域コーディネーターという方の存在だと思っており、こちらの機能を強化していく必要があると思っております。現在は各学校に1名、原則として地域コーディネーターを配置しておりますが、今後は人数の増加だったり、地域コーディネーターを補佐する役目などをつくってはどうかということを検討していきたいと考えております。

最後に、委員の学校運営に対する意識の醸成です。委員の方々は、PTAなど保護者の方、町会関係者、職員や民生委員など普段から学校と関わり合いがあり、地域のためにより学校と関わりを持っていきたいと、これまでもずっと考えていただいている方に参画していただいております。しかし、地域と学校との関わりが、地域というものに比重が置かれるものではなくて、今後も学校の負担となるようなことがあってはならないと考えております。

学校運営協議会というのは学校運営を良くしていくための協議の場ということを忘れないうで、そのような意識を委員が持ち、そのために定期的な研修を実施していくとともに、委員が学校の教育活動に触れて、学校運営に対する理解を向上していく機会を創出していきたいと考えております。

これらの他にも本制度は始まってから間もないため、様々な課題が生じることが想定されております。教育委員会といたしましては、協議会の主催者ではないため、委員として参加することはできません。しかし、可能な限り現場に足を運びまして、校長先生や地域

コーディネーターとの連絡を密にすることで、状況の把握と、よりよい制度運営に向けて取組を進めていきたいと考えております。ご説明は以上となります。

[総務部長]

それでは、コミュニティ・スクールについて意見交換をお願いいたします。

[伊藤委員]

コミュニティ・スクール、私事ですが、他地区で委員をさせていただいたことがあります。その時には、始まって間もない頃だったということもあって、行政の教育委員会の方がオブザーバー参加のような形で現場の雰囲気を知ってくださったり、サポートをしてくださったりということもあったので、多様な、必要なサポートを教育委員会としてもすることは必要なのかなと思っています。

自分の経験からも学校の応援というか、学校の先生もふだん気づかれないような視点やリソースと結びついていくことがあるので、とても意味があるなと思っています。

今、江古田小学校は卒業生というお話がありましたが、先ほどの30万円の時にも、地域でのいろいろな活動の中で、小学校のときに中学生が楽しませてくれたから、今回は30万円を使って小学生に楽しんでもらうような行事をしようという方向で頑張った学校もあったと聞いております。地域への広報もそうですし、地域にしてもらえると、やっぱり子どもは恩返しをしてくれるというか、そういう循環がうまく発展していくと、コミュニティ・スクールが生きたものになっていくのかなと思っています。

そういう意味でも地域の方々、あるいは卒業生の方々にもいろいろご意見いただきながら、子どもたちもそうやって支えられているのだとか、実際に、その中から自分たちが中学生にしてもらい、あるいは大学生の委員にってもらい、そのことで今度恩返しするみたいな、そういう良い循環関係が発展するといいなと考えております。

[区長]

先ほどの江古田小の話は私もびっくりしました。やはり協議会自体のメンバーは校長が決めるのですか。

[教育長]

そうですね。

[区長]

校長が決めるのですね。校長先生もしくはその地域の皆さんの、そういう声があったということなのですね。だから、いろいろな形があってもいいと思うし、始まったばかりな

ので、試してみればいいと思うのですが、少なくとも教育委員会はちゃんと最初出たほうがいいのではないの。

[学校地域連携担当課長]

教育委員会も出ました。

[区長]

出ている。

あと、私が今、伊藤委員の話も聞いて思ったのだけれども、中身を知ることもいいですし、あと、どういうことをやろうとしているのか。もともと、このコミュニティ・スクールの理念などがあって、先ほど話があった学校運営協議会で話し合う内容というのは国が決めているのですか。

[学校地域連携担当課長]

大もとは国が決めています。

[区長]

教員像の協議という結構高尚なテーマがあるけれども、まずは今、学校は何が問題で、地域が何を考えていて、こういうことをやったらどうかというのに、地域が主体的に関わって考えるということが中心だと思うので、いきなり最初に目指す学校像とかと言われてしまっても、なかなか話し合いは難しいだろうなと聞いていて思ったのです。

そういうことも含めて、このコミュニティ・スクールの運営のやり方に対しての情報共有、横の共有みたいなというのは必要なのかなと。これをいきなり区報にというのは難しいと聞いていて思いましたけれども、そういうことはやってもいいのではないかなと思いましたが、いかがですか。

[岡本委員]

今のお話に関連してなのですが、私も今年度から小学校の学校運営協議会の委員長をすることになりました。また、ご縁あって杉並区の小学校でも学校運営協議会の委員をしています。杉並区は先駆的に始めているので、運営の仕組みを学んでいるところなのですが、横のネットワークでいいますと、現状は学校ごとに学校運営協議会のつながりがありません。他校では、PTA関係の人もたくさんやっていますから、ちょっとずつ声をかけて委員長、副委員長のネットワークをつくらうとしているところです。今のところ4割ぐらいの方が入ってくれています。その中で今後、視察をし合ったり、合同研修をしたり、文部科学省のCSマイスターも無料で来てくれるので、そういった研修をすることもできない

かなと、今のところ、私の頭の中で考えている段階です。

さっきの目指す学校像、ビジョンの共有、各学校運営協議会で話し合うことなのですが、ネットワークでちょっと聞いたところでは、今のところやっぱり校長先生の学校運営協議会に対する捉え方は多様かなといるところがあります。どういったことを話し合うのが校長先生次第になっているので、話し合いまで至らなかったという事例もあると聞いています。

ですので、行政として校長先生と学校運営協議会委員の合同研修みたいなものを用意することも、今後はぜひ必要かなと思います。先日、委員向けの研修会はしてくださったのです。大変有用で、我々も勇気を持てたのですが、それを持って各学校に戻っても、なかなか各学校はそういう状況ではないということもあるので、目線のすり合わせがまずは必要かなと思いました。

[区長]

教育長に振ってしまうのですが、コミュニティ・スクールは人を公募でとれるような仕組みがあるとおっしゃっていたのではないですか。公募で来た人たちというのは、コミュニティ・スクールに関わることが条件になっているのですか。

[教育長]

いや、それはいいです。教員像に関する協議ということで、コミュニティ・スクールで、来年うちの学校にどういう先生が必要かという議論の中で、例えば、数学の学力がうちの学校は低いから、ぜひ数学の指導力のある先生に来てもらいたいねと。そして校長もそうですねということになって、段階を置くと、数学に指導力のある先生にぜひ来てほしいと公募ができて、その先生が応募して、合格すればとれるという建前でやっております。

[区長]

教育長から、会議外で聞いているのですが、本当にいい先生が手を挙げてくださっていて、これだけでもコミュニティ・スクールを入れてよかったなと本当に聞いていて思いました。

皆さん、ぜひコミュニティ・スクールについて他にご意見があれば。

[平本委員]

私は教育委員というお役目をいただいたので、コミュニティ・スクールがどういう形で進んでいるのかというのを、比較的ほかの保護者よりは理解しているほうだと思うのですが、やっぱりまだ関わってくださっている関係者以外の保護者の間だと、まず存在

とか意義を知られていない状況が結構あると思っています。

このコミュニティ・スクールをうまく利用して、もちろん地域と協働してではあるのですが、子どもたちの意見表明ともやっぱりうまく絡めながら、それを反映して、実現していくのをしっかり中野区でできるといいなと思っているので、まだ広報は難しいという話はあったのですけれども、できればどこかでやっぱり広報はしていただきたいなと思っています。

子どもたちを置き去りにしないほうが絶対に良いと感じており、何か局所的な盛り上がりにならないように、子どもたちをまず巻き込んで、子どもたちがどういう学校をつくりたいと思っているのかをすくい上げ、こういう地域の皆さんと話し合う機会は今、このようにしっかり中野区はあるのだよということを子どもたちにも知らせて、こういうことを一緒にやってみたいとか、支えてほしいとか、実現してみたいというのをうまくコミュニティ・スクールの中に組み込めていけるように、今年の事例をまた共有しながら、大きな方向を、ちゃんと目線を合わせてやっていって、その中に興味がなさそうな保護者などもうまく巻き込んでいくところも、我々としては考えていけるといいなと思っているところです。

[区長]

先ほどの話とつながるのですね。子どもたちがどういう学校にしたいかというのがまずあって、それに対して大人が、何ができるかを主体的に考えるという。非常に素晴らしいと思いますが、高度なコーディネート力が必要だとか、それを各学校でどうやっていくかというところは、多分、課題になるのかなと聞いていて思いました。

[高野委員]

私自身は協議会には参加していないのですが、身内で参加している者もいまして、まだ始まったばかりのようなのですけれども、委員を見ていると、PTAの保護者の方、また元役員をやられたような結構年配の方が恐らく多いかと思うのですが、やはり江古田小学校みたいに若い方、卒業して間もない中高生を入れるような改革は、各学校でやったほうがいいかなとは感じました。また、ちょっと年代が離れている方も多いので、協議会の方と実際に児童生徒との対話があってもいいのかなとは感じました。

[区長]

そうですね。江古田小学校の例もあるので。江古田小学校の協議会は若い人が多いのですか。

[学校地域連携担当課長]

11人中9人が若い人です。地域コーディネーターの方とPTA会長を除き、大学生と高校生というメンバーですね。

私も出させていただいたのですが、結構活発でしたし、やっぱりその場で、育成されている地域の人が入るといって、相乗効果をすごく感じて、3回目をまた見たいなと思っています。

[区長]

あそこら辺は地域のリーダー的な人が関わっているんで、若い人が参加することで、その後、地域とのつながりを築けるといって目論見があるのではないかなと思います。

だから、一概に若い人を入れろとか、若い人をそろえろとかは、なかなか地域によって違うかなと思うので、難しいところがあるなと思いました。でも、そういうコミュニティ・スクールがあるという情報自体を皆さんが知っていることによって、選択の幅が広がるかもしれないですね。やはり今までは、町会とか地縁の人たちとPTAと、という発想をずっと持っていたので、それは江古田小学校を見たらびっくりしてしまいますよね。そういうのも情報発信をして、まさに区報とかで広報しても良いかなと思います。

[岡本委員]

委員の人選や、また、さっきの地域との連携に関わってなのですが、地区委員会という組織がありますよね。僕も地域でちょこちょこ出回っていたら、大体どこに行っても同じメンバーが、違う組織の中で、会議体で話し合っています。学校運営協議会ができたことで、ここを整理できないかなと思っています。地区委員会には各校のPTA会長やPTAの係の人が出て、毎回報告をされています。そこに現状、運営協議会は地区委員会に関わっていない。そういう仕組みになっていないのです。

学校協議会が、さっきコーディネーターさんがいろいろな個人に、組織につなげてとありましたけれども、本当は学校支援地域本部という組織体が地域にあって、そこに学校がコーディネーターを通じて依頼をしていくという組織の受け皿をつくっていく必要があります。そうしないと、コーディネーターはいつまでたっても、1人ずつの個人的なつながりで人を探さないといけなくなってしまいます。それは地域も育ちません。その組織をつくっていかないといけないのが課題で、それと地区委員会というものをどう結びつけるのかを、今後ぜひ行政としては考えないといけないのではないかなと思っています。

[区長]

まさに我々行政側もちゃんと考えなければいけない、整備していかなければいけない課題ですけれども、青少年地区委員会と、コミュニティ・スクールの関係というのはどうなのですか。メンバーは確かに被っているところは多いですね。

[教育委員会事務局参事（子ども家庭支援担当）]

かぶっています。地区委員会のあり方とコミュニティ・スクール云々というところまでは、地区委員会さんとも懇談はしましたけれど、それについて具体的にこうだということまでは、まだ意見を聞いていないのですね。まずは次世代育成委員のほうで、かなり意見が多かったので、次世代育成委員の在り方についてまず整理をしたというところ。

おっしゃるようなところについて、地域の団体なので、そこは課題として、頭には入れておかないといけないかなと思います。

[区長]

私もメンバーがどこまで入っているというのはそこまで詳しくはないのですが、少なくとも次世代育成委員は今やっている人たちのうちの9割ぐらいの人はコミュニティ・スクールに入ってくれたということだったので、良かったと思っているのですが、青少年地区委員会については、割と今まで地域の横の連携は、この地区委員会によってできていましたといったことを言う人が多いので、意義があると皆さん感じている会議体なのですね。そのため、メンバーは相当かぶっていると思います。活動のことを考えると、やはり整理していったほうがいいのではないのかなというのは、率直には思います。我々としても注意して見ていきたいと思います。

[教育長]

今、次世代育成委員の話が出たのですが、私も校長をやっていたときに、次世代育成委員さんには良くしていただいたのですが、地域ボランティアという形でお願いしづらいということもありました。次世代育成委員は学校ごとに決まっているわけではないので、1つの学校のことを頼みづらいということがありました。今、コミュニティ・スクールになり、学校単位に1人のコーディネーターの方がいますので、学校で困っていることをお願いできていると聞いています。

例えば、中学校では職場体験の体験先を見つけるのに本当に苦労しています。120名の職場体験の事業所を見つけるのに、夜8、9時まで先生たちが500件ぐらい電話をします。その結果、半分ぐらいの事業所から断られます。それが、コーディネーターの方が地域のいろいろな方と連絡を取って、120名分全部見つけてくださったと聞きました。

校長先生が教育の負担軽減になったと話していました。

また、小学校の校長先生も、今までは中野区が人を学校に配置していただいても人が見つからないと、最後は人をつける事業所を見つけてほしいとか、委託にしてほしいとかお願いしていたのですが、今はコーディネーターがいるので、一切そういうことはなくて、コーディネーターの方をお願いすれば、地域の方で人を探していただけるので、大変助かっていると聞きました。各学校に、地域に精通しているコーディネーターがいることが大きな成果につながっていると思っています。

中野区では今まで学校支援していただいている学校評議員という制度があり、私も校長時代に本当に助けていただきました。学校経営に対していろいろなご意見をいただいたり、学校評価をしていただいたり、とても力になりました。校長時代には、地域の方だけではなく、様々な人の意見を聞きたいと思っていました。大学の先生とか専門的な職業の方に評議員会に入っていただいて、学校の教育活動にご意見をいただきたいと思っていました。しかし、大学の先生は、地域の方ではないので休みの日に交通費をかけて来ていただいて申し訳ないと思っていました。せめて「学校予算で交通費ぐらい出したい」と思っていたのですが、学校評議員制度は無償ということで交通費も支払うことはできませんでした。

結果的に、ボランティアで来ていただいたのですけれども、今はもう学校評議員制度を廃止して、コミュニティ・スクールの学校運営協議会になりましたので、この制度だと毎回報償費を出すことができます。交通費にもなりますし、江古田小学校の学校運営協議会に参加している高校生や大学生も報償費を受け取ることができます。会議に、お金をもらって参加するというのは、責任感も生まれると思います。ボランティアだと「今日は、用事があるから行かなくてもいいか」と思うこともあると思います。それがお金をいただいて、会議に責任を持って出るといふことにつながっていくと思っています。

[岡本委員]

学校運営協議会は地方教育行政自体にも影響を及ぼす制度だと思っています。行政から各学校に「ああしなさい、こうしなさい」という時代ではなくなって、各学校で自主的、自律的に学校運営をしていく、そのための学校運営協議会なので、学校運営協議会がこういう学校をつくりたいのだという声を教育委員会で支援する、伴走していく。そういう仕組みになっていかないといけないと思うのです。そういう意味では、教育委員会と学校運営協議会の連携と申しますか、横並びというような意識で、もっとそういうチャンネルを増やしていく必要があると思っています。

せっかく学校運営協議会ができたのに、さっき平本委員からも、まだまだ知らない人がいるというご指摘は本当にそのとおりなので、もっと中野の教育を知ってもらうために、何かそういう合同の対話の場みたいな、地域の方も校長先生方、教職員の先生方も教育委員とかも、みんなで中野の教育をどうしていこうかみたいな、話し合うような場ができればいいなとちょっと思っています。

[高野委員]

先ほど、身内で学校運営協議会に参加してる者がいるとお話ししたのですが、他の委員からもあったように、青少年育成の委員会や次世代育成委員、あと民生児童委員とかも兼任していて、話を聞くと、頻回に会議に出席しているような状態ですので、できれば統合なり、何かうまい方法をとっていただければ少し仕事は減るし、受けてくださる方も増えるのではないかと思います。

[区長]

まず岡本委員の共有できる場について、コミュニティ・スクールが始まって、やはりみんなで考える場があればいいと思いますので、1階のナカノバとかを使ってもらって、やってみてもいいかもしれないですね。

それから、高野委員からお話いただいたことは、これは大変だと思います。多分みなさん熱意で乗り切っていらっしゃるよ。これから地域活動はやっぱりいろいろな人に参加してもらうことも必要だと思いますし、いろいろなものが連立して出る会議が多過ぎるというのは良くないと思いますので、いろいろな会議体の役割を見直して、統合するものは統合していくことが必要だと思います。

[総務部長]

よろしいでしょうか。それでは最後の議題に移らせていただきたいと思います。「中野区教育委員会における『英語教育』に関する取組」です。初めに、指導室長のほうから説明をお願いします。

[指導室長]

では、3つ目のテーマでございます。「中野区教育委員会における『英語教育』に関する取組」についてご説明いたします。

まず、本区の英語教育の目的でございますが、グローバル社会を生きるこれからの子どもたちにとって必要な実践的な英語力をしっかりと身につけられるようにすることです。この目的を達成するために、英語教育の取組を充実させていき、そのことが中野

区の公立学校の魅力の向上につながり、誰もが子育てをしたいまちにしていければと考えてございます。

こちらは令和6年度の国の調査で調べた政府目標、CEFRといいますがA1レベル、これは英検3級相当の力を有している中学校3年生の数でございますが、本区は756人おりまして、全体の62.8%となっております。他の自治体で高い割合を示してございますのが、こちらのグラフのとおり、さいたま市が89.2%、福井県が79.8%、それから福岡市と横浜市が65%を上回っているという状況でございます。中野区も東京都の平均の61.8%を上回っており、他の自治体と比較しても決して低くない割合だと考えてございます。

また、こちらは令和6年度に実施いたしました英語の学力調査の中学校2年生と3年生の結果でございます。知識・技能、思考・判断・表現ともに全国を上回っておりまして、一番右側でございます平均到達スコアにつきましては、中学校2年生が全国と比較しまして4.5ポイント、中学校3年生が1.8ポイント上回っているという状況でございます。

このように本区の子どもは英語の力を着実に身につけておりまして、これまでの各学校での取組が成果につながっているのではないかと考えてございます。

それでは、これまで取り組んでございます、小・中学校の取組を幾つか紹介させていただきます。英語体験事業といたしまして、TOKYO GLOBAL GATEWAYで半日の英語体験プログラムに、全校の小学4年生が参加してございます。また中学生では、軽井沢少年自然の家で1泊2日の中野区イングリッシュキャンプに全校1年生が参加をしまして、ALTによる英語活動に関するプログラムを行ってございます。それから、外国語や様々な文化に触れる機会を創出するために、小学校1年生も外国語活動の授業を年15時間以上実施いたしまして、ここにも区のほうからALTを配置してございます。

そのALTの派遣でございますが、民間事業者に委託をしております、全小・中学校にALTを配置しております。令和5年度からは契約を変更いたしまして、朝から放課後まで1日配置できるようにしまして、授業以外でもALTを活用できるような体制にしてございます。

また、専門的教員の育成と指導力の向上を図るために、英語教育アドバイザー事業をこれまで行ってきまして、小中学校合同の研修を行ったり、アドバイザーが全小学校を訪問して、授業に対するアドバイスをしたりいたしました。さらに、英語検定受験の支援も行っておりまして、中学2年生または3年生を対象に、1回分の検定料を補助してござい

ます。

なお、CEFR A1レベル相当以上の英語力を有すると思われる中学3年生の割合は、令和4年度は62.7%、令和5年度は67.3%、そして先ほどご紹介しました令和6年度は62.8%でございました。

そのほか、文部科学省の補助を受けて、英語のデジタル教科書を全校に導入したり、年に1回、中学生英語スピーチ発表会をなかのZEROで行ったりもしてございます。

最後に、今後、区として目指す方向性についてお話をさせていただきます。冒頭にお話しした政府目標であるCEFR A1（英検3級相当以上）の生徒の割合を成果指標の1つといたしまして、この割合を段階的に増やしていき、80%に到達することを目指していきたいと考えてございます。そのため、今後は英語授業の質的・量的な充実、ALTと連携した指導の充実、ICTを活用した指導方法の工夫、英語力アップに向けた気運の醸成、教員の指導力向上に取り組む必要があると考えてございます。

本日ご参会の皆様のご意見を踏まえまして、学校とともにこれからの取組を充実させてまいります。忌憚のないご意見をお寄せいただけますと幸いに存じます。

ご清聴ありがとうございました。

[総務部長]

それでは、ただいまの資料の説明に対しまして、ご意見ありましたらお願いいたします。

[伊藤委員]

ありがとうございます。私も軽井沢のイングリッシュキャンプに1回だけ参加させていただきました。子どもたち、英語が好きな子、嫌いな子、人と話すのが好きな子、嫌いな子、得意な子、苦手な子、様々ある中で、やはり思い出に残る大きな経験になっているなと思いました。

と申しますのも、英語を使うことの意味とか、英語を使うと自分の世界が広がるとか、楽しいとか、何か英語を実用的なものとして体験できるような機会が多いほうがいいのではないかなと思っておりますので、こういった事業、GATEWAYも含めて、とても貴重だなと思います。

それと同時に、中野区は海外にルーツのある、何らかルーツのある方の数もすごく増えているということをお聞きしています。また多様性ということも本区は大事にしてきたと思いますので、そういった側面から申しますと、単に英語ということだけではなくて、文化の違いについての感受性を高めながら別の文化をリスペクトして、尊重して理解すると

というような、またそこから学び合うというような、そういう体験をしていける中で、英語を学ぶという気運を高めていけるといいのではないかなと思っています。海外にルーツのある方が多くなっているのも、そういったこともしやすい環境に中野区はあるのではないかなと思いますので、先程来の地域でのコミュニティ・スクールですとか、30万円とか、様々なことを連動させながら、文化理解ということも1つの柱にしていけるといいのではないかなと思っています。

個人的には、英検の補助とかもいいのですけれども、やっぱり全体としてそういう文化理解、まずは先生方が英語を得意になっていただいて、学校で文化理解とか異文化体験とかを大事にさせていただくような方向性というのも大事かなと感じているところです。

[区長]

ありがとうございます。まさに昨日までウェリントンから子どもたちが来ていまして、昨日お別れ会だったのですが、2週間の滞在期間のうち、学校で4日間ぐらい過ごしたと言っていました。全員ではないと思いますが、中学生の皆さんもウェリントンの子どもたちと接することによって、まさに今おっしゃった文化理解だとか、違いみたいなものをちゃんと認識する機会になったらと。私はこの交流はかなり意義が大きいなと思った次第です。

特に委員の皆さんも当然感じられていると思いますけれど、ここ最近の外国人に対する偏見・差別みたいなものも出てきていますので、まさにそこを、中野の子どもたちはちゃんと理解しているというのは、我々としてはもうはっきりと目指すべき姿だなと私も思いましたので、やはり英語を学ぶことの先に、そういう人権感覚だとか、国際感覚というのですかね。というものを身につけてほしいなど、私も本当に思います。

[平本委員]

伊藤委員からお話があったとおり、英語を使って楽しいという気持ちを持てるのはすごく大事だなと思っています。私の息子もイングリッシュキャンプに参加して、すごく楽しかったという話をしていたので、こういう機会があるのはとても良いなと思っています。より生きた形で英語を、子どもたちが主体的に活用していく機会をどう増やすかということを考えていけるといいなど、非常に思っています。

ですので、英語ができたほうがいいので勉強するとか、英検を受けておいたほうが有利なので受けるとかではなくて、「英語は楽しいよね」と、英語を使ってコミュニケーションをいろいろな人ととれるから学んでみたいというのを、日常の中に組み込んでいけるよう

なところを、学校ともぜひ共有できるといいなと思っています。

併せて思うのは、やはり英語は能力差が大きく出てきますので、同じように勉強していても、すごく得意な子もいれば、苦手な子もいたりして、恥じらいもやっぱり出てくるところが正直あるかなと思っています。ですので、大きなイベントで、英語が得意な子が一生懸命発表して、あのようになりたいなと思う機会があるのはとてもいいのですけれども、それ以外に、別に発音が必ずしも上手でなくても、言いたいことを伝えるような小さな積み重ねが学校の中でできるような機会も、ぜひ私は大切にしてほしいなと思っています。私は英語が得意ではないのですけれども、楽しいので毎朝英語のアプリを必ずやってから起きるようにしています。

皆さん、知っていますか。易しい英語のアプリがあるのですけれども、それをほんのちょっとだけやるというのを1, 500日ぐらい続けているのですが、それほど能力は上がらないのですけれども、楽しいからやっているみたいなのところもあるので、何か楽しさを子どもたちに伝えられるようなことが増えるといいなと思っています。

もう1つ思っているのが、留学の拡大はとてもいいなと思っています。生の英語を实际使うという経験に勝るものはないと思っています、私も留学に行ってみたいなと思いつつも、やっぱりそういう平等な機会を提示するだけだと、どうしても参加できるご家庭は限られてきてしまうなと思っています。ですので、巻き込み力は結構重要だなと思っています、なるべく全ての子どもたちに、平等というより、公平な機会になるような提供の仕方、予算や枠組みの工夫ができるといいなと思っています。

幸いオンラインの活用も進んできている時代なので、もちろん留学できる子はしたほうがいいですが、オンラインで姉妹学校などつながって、同世代の子どもたちと交流ができる機会にみんなを巻き込むとか、それは必ずしもホストファミリーを引き受けて家に留学に来てもらう、行くという条件つきではない形でできる1つの方法だと思うので、それも含めて、公平を意識する方法も考えてもらえるといいかなと思っていますし、教育委員会としても考えていけるといいなと思っていますところでは。

[区長]

ありがとうございます。やっぱり楽しくないと駄目ですよ。むしろ、イングリッシュキャンプに行ったら辛い思い出があって、英語があまり好きではなくなりましたみたいなのもよくないと思うので、まさにそうだと思います。そこは色々工夫されていると思いますので、楽しく学べることが大事だと思います。

それから、全ての子どもたちが経験するのが良いというのは、本当にそのとおりだと、昨日ウェリントンの子どもたちとの交流を見ていて思いました。これを、ウェリントンからの受け入れをした家庭の人たちが、本当によかったと言っているのですよ。一方で、この受け入れた家庭というのは、中野区で20ぐらいであって、等しく体験できる場というところ、なかなかそれはこのやり方では難しいなということはあるので、色々なやり方を工夫しながら、文化理解につながるようなやり方を考えていけたらいいなと思います。

それと、語学の学習からいっても、2週間は少し短いという意見も聞かれました。そんなに長く行っているのかということも思いますけれども、もう少し長いといいかなというのもありました。

今、高校で短期留学プログラムというのがすごく流行っていて、ニュージーランドも積極的にそれを受け入れているらしくて、1つの単位がやっぱり1学期だそうです。3か月行くと、まあまあ話せるようになる人がいるぐらいの感じらしいですね。だから、3か月は難しいと思いますけれども、その期間も含めて、いろいろ専門家の意見も聞きながらやり方を工夫していく必要があるなと思いました。

[高野委員]

中野区内でも外国にルーツのあるお子さん、帰国子女の方、たくさんいらっしゃいますので、日本語よりも、中には英語のほうが得意なお子さんもいるかと思います。その特徴を生かしていただいて、一緒に会話をする。英語以外でもやっていただければ、文化の理解も進むと思うのですが、まずは英語に関しては、それを生かしていただければいいかなと思いました。

[岡本委員]

あまり新しいことは言えないのですが、僕も心配なのは英語嫌いが増えてしまうことです。点数とか目標を挙げると、そこが各学校、各先生の実践にどのような影響を及ぼしてしまうかということも、やっぱり気にしたいと思っています。

さっき話があったように、イングリッシュキャンプは本当に楽しい経験らしいですね。私も伊藤委員と同行して、ある生徒さんを捕まえて聞いてみたら、英語は苦手なのだけれど、ここは楽しかったとおっしゃっていました。校長先生にも、英語が苦手な子はいるのではないですか。つらいとか、参加したくないとかいう子はいないのですかと聞いたら、特にそういう声は聞いていないと。

また先日、中学校を訪問して、学校行事について生徒さんと意見交換する機会があった

のですけれども、その子も英語は苦手だそうです。イングリッシュキャンプに行って、楽しかったけれども、得意な子ほど自分は楽しめなかった。僕が「じゃあ、どうしたらよかったですかね。例えば得意な子は得意な子で、苦手な子は苦手な子で集まるとかですか」と聞いたら、「いや、それは嫌だ」と言ったのです。一緒に楽しみたいと。僕は、すごく素敵だなと思って、「じゃあ、どうしようか考えたいね」という話をしたのですけれども、やっぱりそこで子どもの声を聞いて、一緒に楽しむイングリッシュキャンプはどうすればいいのかというのを、さっきの子どもの声を聴くにつながるとは思います、そういった事業をつくっていけばいいのではないかなと思いました。

[区長]

そうなのですね。さっきも言ったけれど、英語嫌いが増えないようにするというのは大事な視点だと思いますし、昨日のウェリントンとの交流で記憶に残っているのは、最後に保護者の代表の方が、もう少し話せたら、もっとコミュニケーションが取れたのにと、悔しいと思ったこともあるでしょうとおっしゃっていました。それは来年ウェリントンに行くまでにみんな頑張る勉強しようという落ちだったのですけれども。

そういうことが動機になり得るなと思ったので、やはり自分はもう少し頑張ったらコミュニケーションがとれて楽しくなるなとか、そういうものが経験できるというのが、ひょっとしたらイングリッシュキャンプもあるのかなと思いました。

[伊藤委員]

オンラインの話がありましたけれども、今、オンラインだと簡単に海外とアクセスができて、私事ですが、たまたま先月3、4回海外とオンラインでミーティングしたのですが、やっぱりそういうミーティングをすると人の考え方や物事の進め方は、その人と国によって随分違うとか、いろいろなことを学べるなと思いました。いろいろなオンライン会議システムもありますし、無料のZoomでも45分できるので、いろいろな方に手伝っていただいて、先生方が積極的にALTの人とかも活用して、授業中にオンラインでつないでお互いに学び合う。向こうの人が日本語に苦労しているの見たら、こっちも英語で苦労していてもおかしくないとか、自由な発想で、今ある機器を使ってということに広げていただけるといいのではないかなと思います。

なぜなら、そうすると、留学ができないご家庭とか、一部のご家庭とかではなくて、みんなが教室で、実際の生のいろいろなやり取りの経験ができるので、オンラインはすごく重要なのではないかなと思いました。

[区長]

ちなみに今、各学校の英語の先生というのは、大体英語は話せるのですよね。

[伊藤委員]

昔に比べたら、私たちと比べたら、今の英語の先生はすごくお話しされるように思います。小学校にも英語の先生を入れていらっしゃるの、中野区はいいとは思いますが、全ての担任の先生が英語でのコミュニケーションをどのくらい体験されているのかちょっと分からないですけれども、若い世代はリスニングなどもしていますので、学生を見ていると英語を格段に話すようになっていると思います。

[区長]

大分変わりましたね。

それで今、何が言いたかったかという、例えば、オンラインを活用してどこかの国と何かやるとか、そういうことを多分学校の先生が、小学校の先生なんか特に難しいと思うのですよ、やるのは。だから、例えばそういうこともできるようなALTがいたらいいなとかと、聞いていて思ったのですが、現状としてはどのくらい配備されているのですか。

[指導室長]

ALTは各学校に派遣という形で行っています。学校規模によって、派遣日数が違うのですが、ほぼほぼ毎日いる学校もありますし、週3日ぐらいの学校もあるというような、そういう状況です。

オンラインに関して、今までALTが中心となって何か運営するという取組はないので、これからの検討課題になるかなと思いますけれども、その派遣会社と調整しながら、そういったところも研究していけるのではないかなとは思っております。

[教育長]

校長時代に他区の校長先生と話をしていた、中野区は英語に関して本当に力を入れているのだなというのを感じていました。先ほどから説明がありましたTOKYO GLOBAL GATEWAYに小学生が全員行っていることや、中学生が宿泊でイングリッシュキャンプを行っているのは多分、中野区と練馬区ぐらいだと思います。また、英検の補助も中野区は行っています。

そういう成果が、英語力の向上につながっていて、中野区がこれまでやってきたことは、成果として実っているのではないかなと思っています。

近年、外国籍の子どもたちも増えてきていますので、世界の共通言語でもある英語が話

せるようになると、将来にも良い影響があるのではないかと考えています。

先ほどからALTのお話がありましたけれど、私の教員時代に、日本語が上手なオーストラリア人のALTに、我が家に泊まりに来てもらいました。二人の娘には日本語を話せないことにしてお願いをしました。娘二人は彼が来て、本当は日本語が分かるのだけど、英語しか話さないで、頑張って英語で話していました。1日いてくれるだけでも、最初は自分の英語は、通じないと思っていたのが、一生懸命話しているうちに、何となく次の日になると朝「グッドモーニング」と挨拶したり気楽に話せるようになっていたりして、単語を並べるだけでも相手に気持ちが伝わって行って、「パパ、また来てほしい」と喜んでいました。

やっぱりALTが毎日学校にいるということは、子どもたちにとって、昼休みだったり給食の時間だったり、授業だけではなく英語でコミュニケーションをとる場面が自然と増えて、英語が好きになる1つの要因になるのではないかなと私は思っています。

[区長]

まさにおっしゃるとおりで、私の親が英語の教師だったので、親が教えている学校のALTがよく家に遊びに来ていました。ALTの皆さんは日本語をほとんどしゃべらない人だったので、コミュニケーションをとるときはやっぱり英語でしゃべらなければいけないので結構苦労したけれども、あれが原体験になっているのですよね。ですので、家に来たり、学校で対面したりするというのも、割と何とかなるものですので、1回、みんな経験すれば、何とかしようかなと思う人が多いのではないかなというのは思いました。

だから、ALTも派遣で来て、どれぐらい皆さんが接触しているのかは分かりませんが、恐らくそこに結構イングリッシュキャンプなどのイベントも加えて、普段からどう接して、どういうコミュニケーションがとれるかみたいなのが大きいのではないかなというのは何となく思っています。区として今の課題と、今後伸ばすとしたら更に何をやるか。数字目標にすると嫌いになるのがちょっと不安だという意見もありましたけれども、なるべく気づかれないように、そこをちゃんと伸ばしていくのが、我々の使命かなと思いますので、進めていきたいと思えます。

[総務部長]

他のご意見はよろしいでしょうか。それでは、本日予定した議題の意見交換はこれで終了とさせていただきます。

最後に全体を通して、まず教育委員会の皆様のほうから何かご発言がありましたら、お

願いたします。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

そうしましたら、最後に区長から全体を通じてご発言をお願いいたします。

[区長]

この総合教育会議、本当にやってよかったです。色々なご意見をいただきましてありがとうございました。

こうやって、課題投げ込み型でもいいと思いますので、教育委員の皆さんからも次こういうテーマでやりたいというご意見をもしいただければ、それもいいなと思います。ぜひまたこういう機会も設けたいと思いますし、普段からもいろいろとコミュニケーションをとらせていただきたいと思います。あとは、区報の特集もいろいろ考えていきたいと思えます。どうも今日はありがとうございました。

[総務部長]

以上をもちまして、本日の中野区総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。

【午前 11 時 57 分開会】